



御文章 疫癘(えきれい)章 (第四帖九通)

新型コロナウイルスの感染拡大で、私たちの生活は一変しました。マスクは手放せず、手洗いと手の消毒を何度も行い、ちょっとした外出ですら躊躇するようになりました。三密、ソーシャルディスタンス、新しい生活様式などの聞きなれなかった言葉は、当たり前になってきました。

ともあれ人類の歴史は、感染症との歴史ともいわれます。100年以上前にはスペイン風邪という流行病があり、新型インフルエンザやSARSなどは記憶に新しいです。また、本願寺第八代蓮如上人のご生涯の間(1415~1499年)にも、10数回の流行病があったといわれているのです。

蓮如上人がお示し下さった御文章は、二百数十通あります。今は五帖八十通にまとめられ、四帖第九通に『疫癘章』という御文章があります。蓮如上人が78歳であった、延徳3年の春から夏にかけて疫病が流行しました。この疫病によって死者が多くで、宮中では疫病を治めるために祈禱が行われました。更には疫病が治まることを願い、元号が延徳から明応に変えられたほどでした。『疫癘章』は、大混乱のなか「この疫病でいのち終えることは、前世でどれほどの悪い行いをしたのだろうか…」との問いに対して、蓮如上人がお答えになられた御文章なのです。

「前世でどんな悪いことをした」から「疫病にかかっていのち終わる」という問いに対して、「生まれた」から「死ぬ」という仏教の因果である。たまたま疫病の縁によっていのち終わるだけであって、大して驚くことではないと説かれます。しかし「そうではありますが(中略)伝染病によって死んだに違いないというように人はみな思うもので、これももっともなことでありましよう。」ともおっしゃられているのです。蓮如上人が見られていた、室町時代の人々の混乱は、どの様であったのでしょうか。ウイルスの研究、医学、情報伝達が発達した、現代に生きる私たちはただただ怯え、右往左往するばかりでした。室町時代の混乱は、想像しても思いが及びません。

コロナ禍で、心ゆさぶられた私たちの姿を省みますと、欲望がむき出しになり、褒められたものではありませんでした。仏教では人間の強い欲望を煩惱といいます。その中で最たるものを「三毒の煩惱」といい、「貪欲」(とんよく)「瞋恚」(しんに)「愚痴」(ぐち)の三つをいいます。「貪欲」とは、貪りの心、欲しいものに執着する心のことです。「瞋恚」とは、瞋は怒りと読み、腹を立て、怒り狂うことです。「愚痴」とは、愚かであり、真理をしらず、物事の是非の区別がつかないことです。

思い返せば、マスクなどの買い占めが横行し、高価転売され、これは『貪欲』と思えます。また自粛警察、マスク警察といわれ、揉め事も起こり、いがみ合った心の風潮は『瞋恚』とも思えます。間違った情報におどらされ、さらには間違った情報を拡散し、他者への思いやりが欠けていた姿は『愚痴』とも思えます。そして、自分の思いが当たり前で当然なんだというらわれの心から、自身を省みる心を失い、他のいのちを軽んじ傷つけ、さらには自分自身のいのちも傷ついていくのではないのでしょうか。

親鸞さまは煩惱だらけの自らを「恥ずべし、傷むべし」とおっしゃられました。阿彌陀さまは、煩惱に振り回された生き方しかできない私を見抜き、お念仏こそが本当の拠りどころであったと気付かせてやりたいとはたらいおって下さいます。そして、み教えは私の心をつつす鏡とお聞きします。み教えを拠り所とし、阿彌陀さまのはたらきを聞かせて頂き、お念仏を申し、感謝の思いのなかで生かさせて頂くことで、自分の姿を見つめ直すことが出来るものと味わいます。窮屈で不都合ばかりの今だからこそ、自分の不確かさを知り、疑い合うのではない、いのちを支えあう日々を送って行きたいものです。

草薙善照 員弁組主任(照順寺)

『疫癘章』

当時このごろ、ことのほかに疫癘とてひと死去す。これさらに疫癘によりてはじめて死するにはあらず。生れはじめしよりして定まれる定業なり。さのみふかくおどろくまじきことなり。しかれども、今の時分にあたりて死去するときは、さもありぬべきやうにみなひとおもへり。これまことに道理ぞかし。このゆゑに阿彌陀如来の仰せられけるやうは、「末代の凡夫罪業のわれらたらんもの、罪はいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくふべし」と仰せられたり。かかるときはいよいよ阿彌陀仏をふかくたのみまゐらせて、極楽に往生すべしとおもひとりて、一向一心に彌陀をたふときことと疑ふころ露ちりほどももつまじきことなり。かくのごとくころえのうへには、ねてもさめても南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏と申すは、かやうにやすくたすけまします御ありがたき御うれしさを申す御礼のころなり。これをすなわち仏恩報謝の念仏とは申すなり。あなかしこ、あなかしこ。(御文章四帖目九通)

【現代語訳】

近頃、たいそう多くの方が伝染病にかかって亡くなっております。これは、決して、伝染病によって始めて死ぬのではなく、生まれたときから定まっている業の報いなのです。さほど深く驚くべきことではありません。そうではありますが、今の時分にあって死去しますと、きっと伝染病によって死んだに違いないというように人はみな思うもので、これももっともなことでありましよう。このように、業の報いによって死んでいかねばならない罪深いわたくしたちであればこそ、阿彌陀如来は、「末代に生きる凡夫の罪業がどれほど深くとも、われを一心にたのみとする衆生を必ず救おう」と仰せられたのです。このような彌陀の勅命があるからには、いよいよ阿彌陀仏を深くおたのみ申し上げて、極楽に往生するに違いないと思いを定め、一心一向に彌陀を尊び、疑うころをわずかとも持ってはなりません。以上のように心得たうえには、寝てもさめても南無阿彌陀仏、南無阿彌陀仏と念仏申すのは、このようにわたくしをたやすくおたすけくださる御ありがたき、御うれしさを申し上げる御礼のころなのです。これをすなわち仏恩報謝の念仏というのです。(『現代の聖典 蓮如上五帖御文』)